

今年は、『幕末太陽傳』（1957年）や『女は二度生まれる』（1961年）などを撮り、日本映画史における鬼才として知られる映画監督・川島雄三の生誕100周年に当たります。独特なセンスで映像表現を追求した川島映画は、半世紀を超えても映画ファンを惹きつけ、愛され続けています。本学では、『淵に立つ』（2016年）でカンヌ国際映画祭の「ある視点」部門の審査員賞を受賞し、国内外で高い評価を得ている新世代の映像作家・深田晃司監督と、映画や小説から文化や社会まで、幅広い批評活動を展開している『イメージの進行形』の著者・渡邊大輔氏をお招きし、川島映画の魅力を語りつくすイベントを企画いたしました。司会は、『スター女優の文化社会学』などの著書がある北村匡平准教授がつとめます。ぜひ足をお運びください。

川島雄三

1918年、青森県生まれ。1938年に松竹に入社、44年に織田作之助原作『還って来た男』で監督デビュー。63年に夭逝するまでの間、撮影所を転々として51作品を残す。「日本軽佻派」を自ら名乗り、ハチャメチャなドタバタ喜劇、ユーモアの効いた風刺、卑俗にして露悪的な表現で、ひたすら映画と戯れてみせた日本映画の異端。映像表現の形式を破壊しながらも、冷徹なまなざしで人間をとらえ、独自の映像感覚で、人間味溢れる川島ワールドを築き上げた。

フランキー堺の動きを魅力的に活写した名作として名高い『幕末太陽傳』や、遊郭の周縁に息づく男女のドラマを乾いたタッチでとらえた『洲崎パラダイス 赤信号』、井伏鱒二の原作を換骨奪胎して風変わりな人間を克明に描写した群像喜劇『貸間あり』、若尾文子のエロティシズムをこれ以上ないほど引き出した「大映三部作」（『女は二度生まれる』『しとやかな獣』『雁の寺』）など、個性豊かな作品を残し、いまでも映画ファンを魅了し続けている。生誕100周年に際して、映画研究者による本格的な研究書『川島雄三は二度生まれる』が刊行（2018年11月）。



深田 晃司（映画監督）

1980年生まれ。映画監督。大学在学中に映画美学校に入学。06年中編『ごくろ屋敷』を発表、パリKINDAYO映画祭ソレユドール新人賞受賞。10年『歓迎』で東京国際映画祭日本映画「ある視点」部門作品賞、プチョン国際映画祭最優秀アジア映画賞、13年『ほとりの朔子』でナント三大陸映画祭グランプリ、16年『淵に立つ』で第69回カンヌ国際映画祭ある視点部門審査員賞を受賞。最新作はインドネシアオールロケによる『海を駆ける』。劇団青年団演出部所属。



渡邊 大輔（批評家・映画史研究者）

1982年生まれ。批評家・映画史研究者。跡見学園女子大学文学部専任講師。専門は日本映画史・映像文化論・メディア論。映画評論、映像メディア論を中心に、文芸評論、ミステリ評論などの分野で批評活動を展開。著作に『イメージの進行形』（人文書院）。近刊予定の共著として、『スクリーン・スタディーズ』（東京大学出版会）、『日本アニメの最前線』（フィルムアート社）など。



北村 匡平（本学准教授・表象文化論）

1982年生まれ。東京工業大学リベラルアーツ研究教育院准教授。専門は映画学・表象文化論・メディア論。著書に『スター女優の文化社会学——戦後日本が欲望した聖女と魔女』（作品社）、共編著に『リメイク映画の創造力』（水声社）、『川島雄三は二度生まれる』（水声社）。『ユリイカ』などで映画批評も書いている。

11月26日（月）18時～20時
西9号館デジタル多目的ホール
対象：本学学生、教職員、一般
（無料、予約不要）

問い合わせ：リベラルアーツ研究教育院文系教養事務
電話 03-5734-7689（平日 9:30—16:00）
Eメール ilasym@ila.titech.ac.jp



川島雄三は二度生まれる